

凡例

1. 原ノート

萱野茂二風谷アイヌ資料館に収蔵されている「金成マツノート整理番号28」「魂の泣く声が聞こえる[女のユカラ]」Ramat chish hawe Anu menoko yukar のローマ字筆記体の判読・片仮名化・逐語訳・意識（日本語訳）をしたものである。ノートは全107頁の分量である。

本書には、原ノートの頁の始まりを左上に示している。

2. 金成マツノートの整理方法

1 段目 ローマ字のアイヌ語の原文

2 段目 片仮名表記

3 段目 逐語訳

4 段目 意識

となっている。

①筆記体のローマ字を判読する際は、原ノート通りの表記とした。

②片仮名表記は、原ノートに濁音で書かれているものは表記通りとした。

③原文ローマ字段の数字は原ノートの行を累計で示している。p. 1～p. 107は原文ノートの頁を示し、その頁の最初の行のところに付記した。

3. あらすじの地名、人名の表記について

本文では pommoshiri ポムモシリとなっているが、あらすじでは「ポンモシリ」とした。

あらすじでは他のものも「m」は「n」と置き換えカタカナ表記した。

目 次

凡 例

あらすじ ……………5～18

魂の泣く声が聞こえる〔女のユカラ〕
Ramat chish hawe Anu menoko yukar
ラマツ チシ ハウエ アヌ メノコ ユカラ
翻訳 萱野志朗

《I 私の年若い姉と私の暮らし》

- i. 私の生い立ちと暮らし：私の語り ……………21 頁 [1 : 1]
- ii. 家の外の様子 ……………27 頁 [236 : 123]
- iii. トミサンペチシヌタフカとポンモシリの話 ……………32 頁 [404 : 210]
- iv. 父の甥たち（私のいとこたち）の話 ……………40 頁 [692 : 363]
- v. 年若い姉と私の苦悩 ……………44 頁 [852 : 445]

《II ポンモシリの私の兄たちと龍神の悪い妹》

- vi. ポンモシリの父の甥（いとこ）たちの来訪 ……………50 頁 [1057 : 558]
- vii. 儀式と歓迎の宴 ……………61 頁 [1463 : 788]
- viii. 年若い姉との別れ、神の山の倉へ ……………72 頁 [1844 : 983]
- ix. 殺された年若い姉の魂の語り ……………78 頁 [2066 : 1099]
- x. 龍神の悪い妹の話 ……………89 頁 [2476 : 1315]
- xi. 年若い姉の魂を救出する ……………99 頁 [2814 : 1478]
- xii. 生き返った年若い姉の提案と龍神の妹の処罰 ……………118 頁 [3510 : 1822]

《III 再び私の年若い姉と私の暮らし》

- xiii. トミサンペチシヌタフカへの帰還と酒宴 ……………127 頁 [3818 : 1975]
- xiv. 年若い兄との結婚 ……………137 頁 [4172 : 2151]
- xv. 子孫の繁栄 ……………149 頁 [4606 : 2383]
- xvi. レペンサントウンマツと
ヤンケサントウンマツの返報 ……………153 頁 [4766 : 2462]

魂の泣く声が聞こえる〔女のユカラ〕
Ramat chish hawe Anu menoko yukar
ラマツ チシ ハウエ アヌ メノコ ユカラ
あらすじ

萱野 志朗

〈登場人物〉

1. 私（女性、主人公）
2. 私の年若い姉
3. 私の父（トミサンベチシヌタブ カ出身）
4. 私の母＝ポンモシリウンマツ（ポンモシリウンクルの妹）
5. ポンモシリウンクル（半神半人、私の父の妹を娶った。神の国にいる）
6. モシリコロカムイ＝国の守り神（私の父の弟、私のおじ。神の国にいる）
7. 私の父の妹（夫ポンモシリウンクルとともに神の国にいる）
8. 年上の方の私の兄（ポンモシリウンクルの子、私のいとこ兄弟の上。妻を娶っている）
9. 年若い私の兄（ポンモシリウンクルの子、私のいとこ兄弟の下）
10. ポンモシリウンマツ（ポンモシリウンクルの子、私のいとこ兄弟の妹）
11. 龍神の妹（龍神の女、悪い龍神）
12. 龍神たち（六人兄弟・六人姉妹）
13. 手をつくった人 神の勇者
14. レブンサンタウンマツ（沖のサンタに住む女）
15. ヤンケサンタウンマツ（陸に住む女）

【i. 私の生き立ちと暮らし：私の語り】

私は、私の両親に類似稀な形でとても立派に養育され、毎日まいにち、何不自由することもなく暮らしていた。年若い姉と私は一緒に育てられ、大きく成長した。私の父は裕福な人なので大きな家に住んでいた。梁（うつぱり）の下には神の宝物がぎっしり詰まり、宝器の列が海岸の段丘のように伸びて、それらの上には美しい光が輝いていた。宝壇の手前には黄金の移動自在の寝台が横たえられており、寝台の周りには幅広い平金が巻かれ、黄金の模様が施され、黄金と平金から美しい光が反射していた。

右座の宝壇の手前から下手まで黄金の床となっていて、宝壇の下手には立派で美しい黄金の女の筐があり下座の隅に置かれていた。その前には黄金の枕が、上方には立派な黄金の刺繍衣が竿にたくさん掛けられており、その竿が衣装の重みでたわみ、神光が輝いていた。

私の父は、年老いた翁ではあるが、どこの村や国に彼に匹敵する美貌や容貌の持ち主がいるであろうか、と思うほど美しかった。黄金の小袖を襲ね着し、黄金の鎖を胴に巻き、神授の太刀を腰に差し、黄金の小さな笠を被り、その笠から垂れる紐をきつく締め、笠からこぼ

れる顔は光り輝いた勇者の顔つきであり、格段に素晴らしく見えた。

私の母は一人前の女性で、立派な黄金の刺繍衣を襲ね着した様子がとても美しかった。私の母は、炊事が上手で美味しい食事で私たちは育てられ暮らしていた。両親とも美貌と容貌が素晴らしく二人の顔は神々しく輝いていた。

年若い姉はどこの村やどこの国にもその姉に匹敵する美貌や容貌の持ち主がいるであろうかと思うほどで、神のように薄くかける霧の中へ身を隠し、姿を直接見ることができなかった。私もその姉に匹敵するくらいの美貌の持ち主であり、薄くかける霧の中心に身を隠し、周りにはとても美しい光が明るく輝いていた。私と年若い姉と二人で仲良く、一緒に暮らし、左座の内部は絹織物で作られた部屋で成長した。夜には私と年若い姉の二人はそばで寝床につき、二人の笑い声や話す声が家の中に響き渡った。夜にも関わらず、女の宝刀の光が昼の日差しのように明るく輝いていた。

年若い姉が少し大きくなると、私の母は炊事の仕方やごみの掃き方などを教え、年若い姉を連れて薪取りや山菜採りをした。私と年若い姉の二人は、母から針仕事や女性の仕事をことごとく教えられ、二人とも手先が器用だったので、刺繍した模様は二つ三つの立派な雲となり立ち昇るかのようであった。私の両親は、右座から手庇（てびさし）を高くまたは低くしながら、二人の針仕事の様子を眺め、驚きのあまり口から魂が飛び出さないように、手で鼻や口を押え驚嘆していた。

私の両親は、私たち二人を可愛がり、うなずきの仕草をしながら笑顔を見せた。私の母と年若い姉は、私を可愛がり過ぎかつ敬意をはらい過ぎて、私から燃えさしを受け取る時や私のごみを掃く際にも、重々しくふるまうほどであった。

【ii. 家の外の様子】

ある日、年若い姉が薪を取りに、山菜を取りに山へ行く時に、私も一緒に行きたくて後を追いかけた。家の外へ出て見たところ、平地で育てられているものと思っていたが、険しい丸山が天空上へ高くそびえ立っていて、その丸山の上に黄金の家や黄金の城が重なるように建ち並んでいた。折れた岩山の真ん中まで暗くむらむらと湧く霧がたなびいており、私たちの家の外側は美しく飾り立てられており、驚嘆した。

岩山の頂上から浜の方へ下っていく道は、九十九折りがあり曲がりくねっていた。その道からは遥かに大海原が見わたす事ができ、どこまでも凧いだ美しい海が光り輝いていた。凧の鳥、凧の禽（とり）が潜って餌を漁る声ははなはだしく賑やかで、その様子を見ると、気持ちがとても明るくなった。

設えられている祭壇は、島のようにどうどうとして立派で、祭壇の端から山へ延びる獣道には獣の足跡が黒々とし、トミサンペチから下る道は光り輝き、河口から潮流が入り込み海原のおもてに広がる様子は豪快であった。黄金の城へ当たる風ははたはたと鳴り響き、大地に当たる風はゴーゴーと鳴り響いた。黄金の城は人間の住居のようではなく、立派な御座所を凌駕する様子で、私は驚嘆した。

家の東の方にはまた、黄金の家や城が重なり合うようにして建ち並んでおり、地面のすぐ

手前が美しくきらめき、まったく同じように黄金の城へ当たる風ははたはたと鳴り響き、大地に当たる風はゴーゴーと鳴り響いた。この立派な御座所は留守であるように私は思った。

私は、私たちの住み家の外側を初めて見て、本当に驚いた。

毎日まいにち、私と年若い姉と二人で一緒に行動し一緒に笑い転げて、とても楽しく暮らしていた。二人で針仕事の刺繍をしながら、さらにいろいろなことを話しあって楽しく暮らしていた。私の両親も何とまあ仲が良いのだろうか、格段に違って、いろいろな話を一緒に楽しく語り合い笑いを浮かべていたので、私はその話に感心しながら暮らしていた。

私が幼い頃から成長する間に聞いたところ、はるか遠い村はポンモシリであり、ポンモシリウクルは二人兄弟と妹が一人だという。その兄弟は、度胸や雄弁さや容貌にしても神々や人間の中にも匹敵する者はいなかった。その妹の容貌や技芸にしても神々や人間の中にも匹敵する者はいなかった。兄妹たちのこのような噂がいくつもの村を越え、立派な評判として伝わった。この話を聞き、私は本当に感心した。

【iii. トミサンベチシヌタブカとポンモシリの話】

ある日、父は何かを言いたいような様子で、火箸で囲炉裏の燠を動かし、筋をつけて突き刺してしばらく間をおいて次のように語った。

私の娘たち、よく聞いて下さい。あなたたちも立派に成長したので、言い伝えを語ります。あなたたちが住んでいるこの村の名は、トミサンベチシヌタブカと言うのです。その昔、二人兄弟と一人の妹の三人兄妹で暮らしていたが、私の弟君である国の守り神は、人間であるが容貌や度胸や雄弁さにおいて神々の中にも人間の中にもそれに匹敵する者は一人もいなかった。私の弟は、人間から妬まれたり憎まれたりしたので、心を一つに団結して、近くや遠くでいくさの準備や戦争の支度をしている者たちへの防戦に明け暮れた。この事は大昔から神々や天上界にも知れ渡っているのに何も変わっていなかった。私は先祖の村を穏やかに治めて静かに暮らしたいと思っていたが、心を落ち着かせる事ができず、いつもびくびくと怯え、嫌な思いをしながら暮らしていた。まだ若かった私と弟と妹の三人で力を合わせて、激しいいくさに立ち向かった。二つ三つの沖の国へ、私たち三人は追い回され、いくさや戦いも生半可では無く、三人で辛酸を嘗めながら育ったのだ。

この戦いで、はるか遠いポンモシリの村を通過する際に、半神半人の首領ポンモシリウクルとその妹が神の掟と殿の掟で私たち三人へ加勢、救援してくれたのだ。

私の妹は、トミサンベチの水源の上へ神から降ろされた宝物で襟首にたくさんの飾り付けをし、ポンモシリウクルへ嫁いだ。

またポンモシリウマツ＝あなたたちの母は、神の宝物で襟首の上を飾り付けされ、トミサンベチの私に嫁いだのだ。

モシリコロカムイ、私の弟君で国の守り神は、人間から妬まれたり憎まれたりしたので、「勝手にしろ」と腹を立てて神々の中へ怒って出て行き、神々の中で夫婦となって安心して暮らしたがった。そうしてこう語った。

「年若い私の兄よ（主人公の父を指す）、あなたが先祖を継ぐ者なのです。先祖の立派な御

座所に住み、上流と下流を治めることになるでしょう。私たちの家の東の方には、大昔に神より授けられ代々受け継いできた『神の山の倉』がある。私たちはその御座所を守護し、火を焚き、その上流と下流を治めるつもりだったが、周りからひどく憎まれたため悲しくなり、神の国へ夫婦ともども怒って行ったのです。もしあなたが息子を二人持つなら、弟の方に『神の山の倉』を託し、守護して、神々が寂しがることのないようにいつも火を絶やさないように頼みます。そうすれば私たちが神の国へ行っても、私たちの血統が繁栄するのです。」

そうして、まあ何ということだろう、モシコロカムイである父の弟は、本当に人間の国を離れて腹を立てて神々の中へ出て行ってしまったのだ。

語っている父の顔は意気消沈し、母は二つ三つの清い涙を流し、父が落とした涙は雨のごとく膝の上に流れ落ちた。

モシコロカムイである私のおじは、理由も原因もなしに呪われかつ憎まれたことを聞き、私の鼻孔は塞がり、涙は雨のごとく膝の上に流れた。年若い姉も同じように涙を流し、私を不憫に思うあまり泣いていた。

【iv. 父の甥たち（私のいとこたち）の話】

再び父は次のように語った。

私には男の子はおらず、あなたたち二人の娘を持った。ポンモシリの村の私の義理の妹は二人の甥と一人の姪を産んだ。私は、自分の上の娘と下の甥を一緒に育てた。上の娘と下の甥が一緒になって、この立派な御座所を守り繁栄させて欲しいと考えた。上の甥はもう妻を娶って先祖の家を守っている。

私の年下の甥は、幼い頃から土台付きの板作りの家で育てられた人で、今その噂が立派な評判として伝わっているのだ。

私の年上の娘、あなたはポンモシリの村に行って、私の年下の甥と連れ添い、炊事をすることになるのです。

ポンモシリの私の妹夫婦はずっと前に神々の中へ行ってしまった。私たち夫婦も早く神々の中へ行きたいが、このように目的があり、まだあなたたちも幼いので、良い頃合いになり、御座所をあなたたちに任せて立ち去っても良いと思った時に行くことにする。私たちには男の子はいなかったが、私の年若い下の娘こそ、男の勇敢さや雄弁さを凌ぎ、美貌もある。あなたのおじが残した言葉を聞き、『神の山の倉』である立派な御座所を見守るのです。

私の父は、いろいろな先祖の話や教えを初めて私たち二人に聞かせてくれた。そのように噂が立ち驚嘆を覚えたような人々と私たちが一族であることが、とても喜ばしかった。

【v. 年若い姉と私の苦悩】

年若い姉は、泣きながら次のように言った。

「私は、妹を可哀相に思い可愛がりながら、二人仲良く暮らしてきたが、人間の行いに従い私は結婚をすることとなった。貧乏人でさえ私の村では、両親を大事にし、妹にもいつでも会えるはずなのに、遠いポンモシリ村への嫁入りを私はしたくない。両親と妹の三人に背を向けて遠くで生きていけるものだろうか、本当に思い悩みながら暮らしている。」

年若い姉がと同じように私も思っていたため、私も泣きながら話し、二つ三つの良いことを年若い姉に教え、私たちの父は老衰したが、その意向に背けば罰を受けることになるので、うわべだけでも喜んでるようにするつもりだと言った。

私は『神の山の倉』のとても立派な御座所の守護と世話を任せられたことにも複雑な思いを抱いたが、叡智に富み、勇敢さを持ち、素晴らしい美貌の私を父は頼りにしていたため、父を気の毒に思い、言うことを聞くことにした。

年若い姉も、年寄りの両親に気苦労をかけずに嫁入りするようにとの私の熱心な説得によって、嫁入りを承諾することにした。毎日、私たちは山へ行き平地で泣きあい、互いに二つ三つの良いことを教えあった。二人で泣いてから、家に戻ると二つ三つの笑い声をあげ、両親は私たちに笑顔を向けた。

ある日、年若い姉は、一人でウバユリの根を掘りに行った。私は家で刺繍をしていた。年若い姉が山から帰って来たが、本当に疲れた様子で、「お腹が空いた」と言って、厚司の着物をボロボロに破り、腐った麻縄で腰を締めて、囲炉裏の下座の炉縁を離れて灰をほじくり返しながらか座っていた。

両親は、神のごとく顔を日光のごとく光り輝かせながら、年若い姉の顔をよく観察しながら、両親は異口同音に次のように言った。「可哀相な娘よ。たとえお腹が空き、疲れていたとしても、囲炉裏の下座から離れ灰をほじくり返しているとはどういうことだろう。」そう言いながら、両親は笑った。私と年若い姉と二人一緒に笑う声が家の中で美しく響いた。

その時に家内の召使は全員外に出ていき、屋外の召使は全員家内に入ってきて、みんなが驚き、あるものが唾を飛ばして白い目をむきながら言った。

【vi. ポンモシリの父の甥（いとこ）たちの来訪】

「私が信頼をおく神々たち、お聞き下さい。私たちの入り江から遙か遠い沖合に黄金の小さい帆掛け舟がいて、舳先で波を掻き分けながら私たちの入り江に向かってやって来ている。舟から、小さい霧に包まれながら四人が下りてきて、二人が一組になって何か大きな荷物を運び、この立派な御座所に進んでやって来て、今岩山の頂に登り、もうすぐ到着するところなのです。」

四人が到着するのは、もう少し時間がかかるだろうと思っていたが、私たちの家のそばで何者かが歩く音と共に太刀の鏝（つば）の音が美しく響いた。何者かが玄関の土間に入り、案内を乞う咳払いと武具の触れ合う金属音がしたかと思うと、何者かが簾戸を揺るがしながら光と霧を伴って入って来た。

私は、恐れ慎みながら前髪の隙間から見てみると、霧に包まれた二人が入ってきた。巫術で、先に入って来た者の霧の中心を払いのけて見てみると、年若い少年が黄金の小袖を襲ね着し刀を佩（は）いていた。その少年の装いは、私の父にそっくりで、黄金の鎖を胴に巻き、神授の太刀を帯に差し、黄金の小さな笠をその笠の紐で少年は締めて、笠の脇から見える顔は光り輝いていた。立派な大きな包みやいろいろな小さい行器、まるで黄金の中から掘り出されたような大きい束を持っていた。

後から入って来た者の霧をようやく払いのけて見ると、先に入って来た者と同じかそれに優る者であった。年若い少年で、髭が生え揃っていない幼い少年だったが、美しく飾り立てていた。黄金の小袖を全身に襲ね着し、黄金の鎖を胴に巻き、鞆の上に神像が彫られた長く反った神授の太刀を帯に差していた。黄金の小さな笠の紐で自分の顔の上をきつく締め、笠の縁から見える顔は光り輝いていた。黄金の小さい行器や、他にも何か立派な大きな包みを両肩に乗せながら、私の後ろを通った。

ちょうどその時、案内を乞う咳払いと共に男二人が入って来た。その二人は類い稀な勇者たちで盛装をしていた。大地の神（シリコロカムイ）なのか、木片を無造作に伐って、それを縄で束ねたものを一人ずついくつか背負って、唸り声と共に入って来て、横座の上に大きく積み上げた。

神のような二人は左座へ膝を並べて座り、私のおじか、私のおばか、と異口同音にいっせいに美しい声を響かせた。私の両親の両ひざの上に彼らが顔を近づけると、両親はとても驚き目を大きく見開きながら、ポンモシリの私の甥たちが私のところを訪れたのではないか、と言った。

神のような二人は異口同音に次のように語った。

「その通りです。すぐにでも私のおじおばや妹たちに会うためゆっくり訪ねようと思っていたが、何かと忙しかった。私の弟や妹も大人になったので、私は神の祈祷の儀式や先祖供養をしたいと思っている。私は、熊や鹿の毛皮を集めて、弟を連れて、先祖がしていたように殿の国へ交易に行ってきた。神の殿様は、我々の訪問をととても喜んでくれた。

その昔の神の私のおじや父などの話でもしながら、涙とともに可愛がられ、毎日まいにち神の殿様と一緒に美味しい食べ物を食べ、神の酒と一緒に飲みながら過ごし、引き留められて、喜んで帰った。その帰りにトミサンペチシヌタブカへ立ち寄り、あなたたちのおじの所で神々を祭るためにお酒を捧げるのです。あなたたちのおじへ酒をあげて、神々をその酒で祭らせて下さい。私たちの兄弟分に背負わせて運んできたのです。

他のものは私たちが持っているものであり、神々を祭るために私たちが持って来たものです。これらのものは、私のおばや私の妹たちを喜ばせようと思ったもので、小さい絵や小さい手土産です。」と言いながらまた他の立派な大きい包みを解くと、その中にはいろいろな美味しいものや絹織物の反物などたくさん入っていた。

私の両親はそれを見聞きして、一日中、国中が揺れるように驚いた。

私の両親は「甥よ。心臓よ（愛おしい）。」と言った。神のようなお方を一緒に撫でさすり、「本当に私たちの甥たちは立派になった。あなたたちは殿の国へ交易に行き、私が飲みたい神の殿の酒も持って来た。私は神と共に喜び感謝します。」と二十、三十の拝礼を重ねた。

【vii. 儀式と歓迎の宴】

ポンモシリの神は「祈祷の儀式を済ませ、すぐに帰りましょう。」と言いながらいろいろな鉢を取り出し、件の大きい木切れの綱を解いて栓を抜くと、中には酒が詰められていた。澄んだ水のような神の酒で、私は殿の国の酒を初めて見た。私の母は立派な手土産をもらっ

て喜び、何度も見ては感心し、誉めそやした。殿の国の美味しい食べ物や美味しいものを私も食べてみたが、本当に味がよく心から喜び感謝した。

私は初めて若い男に会ったので、見ない振りをして、とても恥ずかしく、髪の毛を地面まで垂らし、自分自身で薄い霧の中へ入り恐れ慎んでいた。年若い姉は振り向くこともできず、囲炉裏から離れて灰をほじくり返ししながら、恥ずかしさで不機嫌になり前屈みでうつむいていた。

私の父とポンモシリの神は、祈祷の儀式を執り行った。遠い神や近い神への杯を揃えて儀式を終えると、先祖の言葉は次の通りであると告げた。「私の年上の娘がポンモシリへ嫁ぐことになっている。私の年若い娘は、あなたたちのおじの『神の山の倉』を守ることにしている。」

ポンモシリから来た年上の兄は「よいことだ。」と言った。年若い兄は無垢であったから呼吸困難となり、振り向くことさえできなくなった。

私の母は、二つ三つ水滴を滴らせながら炊事に精を出し、神のようなお方に食べ物を配った。みながいっせいに自分のお膳を、高く低く捧げて拝礼ののち食事をした。食事中はみなが本当に喜び、私の両親は笑い声をあげて、言葉を交わしていた。私と年若い姉の二人は、無言でいた。

ポンモシリの年上の男は、霧を散らしてようやく私と年若い姉の顔を見ると、さっと青ざめ、視線を低くして、年若い姉の顔をうかがっていた。そして酒が言わせたものか、年上の兄は、笑い声を美しく響かせて言った。

「今、初めて私の妹たちにご挨拶申し上げます。年上の妹は、いったい何に腹を立てて不機嫌な顔をしているのだろうか。このような行いを私の年上の妹がするのだろうか。さあ早く酒を飲みなさい、食事をしなさい。」これを聞いて年上の姉はますます恥ずかしかった。

私の両親は「このことはいわゆる、若い人たちが初めて会った時に見ない振りをすることなのです。」と言い、私は年若い姉の恥ずかしさがよく分かった。私はポンモシリの年若い兄をよく見たが、彼は私たちを見もせずに私の両親と食事をした。

食事が終わると、なかなか別れられずに、ポンモシリの兄弟たちは「これから何度もあなたたちを訪ねます。」と言いながら、両親に二十、三十の拝礼をして、舟で帰っていった。

そのあとに私と年若い姉と二人で殿の国の酒を飲み、私の両親も毎日一緒に酒を飲んで喜んでいた。兄たちと言うのもっと年上を指すと思っていたが、実はまだ少年であった。年若い私の兄は遥か遠くでも美貌や勇気においてたいそう優っており、いったい人間だろうか神だろうかと驚嘆し、年若い姉に相応しい相手であると思った。

【viii. 年若い姉との別れ、神の山の倉へ】

ある日私の両親は、満面に笑みをため、私たちに次のように言った。

「今日、私の年上の娘、ポンモシリの村へ嫁に行くことになっている。結婚相手のところに行くのがあまりにも遅いと、人を悪くする神や人を嫉む神が振り向いて運が悪くなる、と神や先祖の言い伝えがある。さあ、今日あなたは行くことになっているのです。私の年若い娘

もこれからとても立派な御座所の内部へ行き、火を焚いてその御座所を大切に守るように頼みます。」

両親から命じられたので、私たちは立ち上がり、裁縫箱をそれぞれ持ち、母の古い長持ちにいろいろな絹織物や女性の宝物をいっぱい詰めて、年若い女の召使に背負わせた。私は年若い姉と一緒に外に出た。両親は微笑みながら「私の娘たちは、淑女であるからよく聞きなさい。」と言いながら、二つ三つの良いことを私たちに教えて見送った。年上の娘が年下の娘の手を引いてとても立派な御座所の戸口に着いた。

私たちは玄関に回って行くと、家宝や宝器の香りが烈風のように私たちを後ろへ押しやった。黄金の簾はきらきらと光り、私たちはその簾をゆっくりと開くと、庭の上の光と霧とともに中へ入った。家の中には宝器が列をなして、黄金の行器と筐と木の行器と筐があり、それらの宝壇の上には首長が差す太刀には二つ三つの束が付き、一緒に垂れ下がった房飾りが揺れていた。宝壇の手前には黄金製である移動自在の寝台があった。黄金の床はずっと平坦になっており、炉縁も黄金でできており、右座の宝壇の下手には女の黄金の筐が、また下座の隅の前には、黄金の枕が置かれている。

どこで生まれどういう育ちの人が作った物であろうか、と思う立派な黄金の刺繍衣が、上の方と下の方の衣装掛けにたくさん掛けられており、竿がたわんでいた。その衣装の上には二つ三つの神光が輝き、とても気持ちが良くなった。ここを守るように言われて、それほど期待をしていなかったが、尊い神の住処を凌いでいる様子の御座所を見て驚嘆した。年若い姉が私を手伝って火を焚きながら、二つ三つの良いことを互いに教えあった。

私と年若い姉とは別れわかれになり、私は年若い姉を外まで送って行き、私は櫓の上に立ち、年若い姉が遠くへ飛んで行くのを見送った。年若い姉は、涙を流しながら二度三度と振り返ったが、私は年若い姉を見失い、涙を落としながら家の中へ戻った。

【ix. 殺された年若い姉の魂の語り】

それからとても立派な御座所の中で座り、私は年若い姉を思い出すと、戸外へ出て、住んでいる城の近くを歩きながら、周囲や海原などを見て楽しく過ごした。年若い姉は今ももうポンモシリ村の仲間に入っているのだろうか。ずっと『神の山の倉』に住んでいると、年若い姉には会えず、私はこのまま生き抜けるのだろうかと考え、二つ三つの清い涙が落ちた。合間に私は刺繍をし、夢中になって、何に不自由することもなく暮らしていた。

ある日のこと、何日か後の夕食の片付けを終えると、不意に年若い姉のことが心配になった。本当に姉の顔が目の前にぶら下がるように感じ、何とか心をよそに向けようとしたが、なお一層その心配が膨らみ、泣きたい心持ちとなった。私は今まで年若い姉のことを何ひとつ心配することもなかったのに、何ゆえかこの晩に以前にも増して姉のことを思い出し、心配の心を覚え、悲しい顔色でうな垂れていた。囲炉裏の中へ目を向けて、私は眠ることもやる気も出ずにいたが、何となく不思議に思い、耳を澄まして聞いていたところ、はるか遠くから魂の泣く声が聞こえてきた。そのあと、二つ三つの魂が悲しく泣く声が聞こえ、その声は黄金の響きで美しく響き、間近に迫ってきた。少しの間（ま）があり、上の方の棟木に鳥

がとまる気配を感じてから、魂の泣く声は、年若い姉の声色だった。

年若い姉の声色は次のように語った。

キムズンマツ、私の妹よ、よく聞いて下さい。ポンモシリ村へ私が到着すると、私の兄たちも兄の妹（ポンモシリウンマツ）も嫁も私を可愛がり、母家（おもや）に私は暮らしていた。年若い私の兄たちは、鹿や熊の毛皮をたくさん集めて、何度も殿の国へ交易に行っていた。それから結婚の儀式をすと言って、それから毎日まいにち山へ入って、交易のために殿の国へ何度も行った。その間、私は一人でとても立派な御座所の留守番をする。

私が留守番をしていると、私の兄たちは海を越えて交易に行った。その翌日、私は刺繍をしながらいたところ、不意に、なめした獣の皮を被って魔が差したようにぼうっとして眠くなり、囲炉裏のそばで袖枕を伸ばして寝ていたが、心の中で考えを巡らしていた。

戸口の陰で何か得体のしれない者たちがひそひそと内緒話をしているのが見えた。戸口の所に美しい年若い女二人がいるのが見えた。その二人は、とても立派な黄金の刺繍衣を全身に襲ね着していた。その頭には私が根こそぎ殺しつくすもの（？）が生えていて、少年の頭で絹織物の頭巾を被り、小さい懐刀の刀身を手に持ち、次のように囁きあっていた。

「私たちがの方が、美貌もあり手先も器用で本当の淑女であり、ポンモシリウンベと一緒にになりたいと思っていたが、殺されて私たちは恥をかかされたのだ。私たちは少年の頭を自分の頭に付けられ頭巾を被せられ、食料もなく遠い庭の上に投げ捨てられた。私たちは淑女の子孫であったのに一緒に斬られ、道に迷いどうすることもできない。私たちは本当に腹を立て、可哀相であり、私たちのような女はこの国の上では連れ添うことはできない。

私たちは仕返しをし、ポンモシリウンベが妻を娶ることはできないようにしたいと思っていた。トミサンベチヌスタブカから妻を娶ったと聞き、その嫁いで来た年若い女を殺すつもりだ。その年若い淑女には腹を立てていないが、ポンモシリウンベに生涯の間、いつまでも辛い思いをさせよう。」

私は、年若い女二人がささやき合う声を聞いていたが、全く身動きができなかった。彼女たちは家の中へ入って来て、私の頭上に足を下ろし、出し抜けに私の胸を両方から突き刺した。刺された時、「ぶすり」という音が鳴り響いた。良い夢を見ているかのごとく、気が遠くなり、眠っているのか死んでいるのかも分からず、少し経って意識を取り戻し、自分自身を見てみると、今はもう魂となり神になっていた。私は、死んでから二～三日経ち、誰もいない家に一人でいたが、誰もそれに気づかなかった。ようやくポンモシリウンマツたちが気づき、大勢の人々がそのとこで驚き、霊力のある人たちもたくさん集まって一緒に巫術を行ったが、何が私を殺したのか全く気付かれず、本当に惨めな気持ちになった。

墓場から神々の中へ行くため魂だけが離れているのが私であり、神である私はこの次第をよく知っている。なぜ私は憎まれ殺されたのか、その理由も知っている。

【x.龍神の悪い妹の話】

天国の龍神は、男の六人兄弟と女の六人の姉妹の十二人兄妹であった。一番年若い妹は、神の国で自分に相応しい相手を見つけることができず、人間の世界を見て、ポンモシリウン

クルの年少の男（年若い私の兄）を見初めて、結婚を望んでいた。龍神の一番年若い妹は、幼い頃から夜も昼も棟木に降りて年若い兄を見ていた。また、悪い行いが発覚しないよう神々の目先に霧を巡らして目を塞いだ。

龍神の一番年若い妹は、ポンモシリウクルの年少の男を殺して、その魂を天国へ持って行き連れ添いたいと考えを巡らせた。遙か遠くに住むレプンサントウンマツとヤンケサントウンマツを惑わし、ポンモシリへ来させた。龍神の女の思い通り、年若い兄は立腹した。「私はまだ結婚していないが、トミサンペチシヌタブカから私の妹がこっちの方へもう少しで来ることになっている。ひどく悪い女たちは、この事を聞いていないので、無礼なことを私に言うのだろうか。」と、二人の年若い女を殺し、少年の頭の毛を刈り、絹織物の頭巾を被せて、遠い庭の上に投げ捨てた。それから油断して、龍神の女の思うままになったのだ。

私が神の国からポンモシリの村を見ると、兄たちは殿の国との交易からたった今戻ったところで、私が死んだことを知った年若い兄は、私を追って神の国へ来るために命を捨てようとしている。

私の妹よ、年若い私の兄の所へ行って、兄を救って欲しい。このようにひどい悪い龍神の女を神罰、厳罰に処することができれば、私は安心できる。私の父母にもそう言って、年若い兄と連れ添って、『神の山の倉』を守って欲しい。ポンモシリの村に私が嫁ぎ、もし子供ができたなら、父の亡き後も守ることができたが、今はもうそれも叶わない。

私たちは仲良く暮らしていたが、私が龍神の女に嫉まれて、このような結果になり、年老いた両親も私の事で気を病み気の毒に思うが、私にはどうすることもできない。

【xi. 年若い姉の魂を救出する】

私は年若い姉の話聞き、狂わんばかりの怒りに駆り立てられ、天井の煙出し穴から上空に高く舞い上がった。真っ暗闇の上空を飛んでいると、星の上は平坦になっており、天の表に大きい黄金の鳥がいた。黄金の翼は光り輝き、嘴は槍のように光り輝き、爪は鎌の林のようになっている、その眼からは本当の雨が降っていた。その様子を見た私は驚嘆した。

私は、その鳥を捕えようとして櫓の上から天空上へ高く舞い上がり、その鳥は二つ三つの至天（地球上のある地点）の間を滑るように流れて行った。私は、先回りをして行く先々で握り拳をかざして、何度目かでその鳥を抱きかかえて捕まえた。すると急に軽くなり、私の掌へ一つの死人の魂が転がったので、その魂を私の口に入れ、

「さあさあ、私の憑き神たちよ、ポンモシリの村へ私を送って行ってください。龍神の女は、女神なので神同士で結婚すべきところを、人間界のポンモシリの年若い兄に恋焦がれ、その魂を神の世界へ持って行こうとした。すべての神々の目を塞いで悪事がばれないようにした。龍神の女は人間を馬鹿にした。男兄弟のいない私であるが、年若い姉が立派であり事情を察知した。人間を嫉む女神が腹だたしい。さあさあ、どのような神でもこちらを振り向いて、年若い姉を生き返らせて下さい。さもなければ、私は人間の女であるが神の国を滅茶苦茶に破壊してしまう。」と泣きながら言った。すると神風が巻き起こり、私は軽やかに吹き上げられた。

夜が明けてポンモシリ村の山の奥地の墓地に着くと、私は泣き叫びながら姉の墓の墓標を引き抜き投げ捨て、埋葬された年若い姉の遺体を掘り起こした。その死体は、凍ったまま死装束を身に着けていた。年若い姉の死装束をすべて剥ぎ取り、裸の身体を私の前に横たえて体を拭き、二つ三つの細長い手草でお祓いをした。私は自分自身の帯を解き、自分の絹織物の着物を、その死体をぐるぐる巻きにした。私は、「姉さんよう。」と絶叫し姉を抱きしめて愛撫し、小脇に抱えると、ポンモシリの村を目指した。

ポンモシリ村では幣棚のそばに大勢の人々が集まっており、年若い兄は、自暴自棄になって自殺しようとしていた。私は鳥のふりをして降り立つと、事情を話し、「さあさあ私の兄たちよ、元気になって天上の神々を招き、姉を生き返らせて下さい。」と頼んだ。すると大勢の人々もみないっせいに振り向いて驚き、私の年若い兄は姉の亡骸を両手で抱え、立派な御座所の中へ運んだ。私は後から這って入って見てみると、宝を飾ってあるさまは本当に私の家のようにあり、内部も外側もどこからどこまで立派で私は驚嘆した。

姉の亡骸を右座に横たえると、黄金の葛籠を出し、その中から六段重ねの筐を一つずつ縛った紐を解き、その中から魂を呼び戻す夫婦の宝物を取り出した。年若い姉の亡骸の胸の上に置き、悪い龍神の女神の話神の老媪に聞かせた。何とまあ雄弁であって叡智に富んでいることなのだろうか、喉の奥が美しく響き、抗議する言葉はカッコウの声のように転がり、私は祭壇の前で神々の先祖の根源を明らかにしながら、痰を吐いたところ、件の死人の魂が転がった。私は年若い姉の胸を頭わにし、歌で喉を美しく震わせながら先ほどの人の魂を何度も擦り、その小さい胸を縮みあがらせた。

年若い姉の血色がよくなり、睫毛が動き、足の指がかすかに反り返り、みなびっくりした。薬が入っている小さい鍋を囲炉裏の火に掛けて、年若い姉に薬を飲ませた。「姉よ。心臓よ。」とわたしは言った。

年若い私の兄は本当に驚いて、自分の魂が飛び出さないよう鼻と口に拳を当てて言った。「私の結婚相手である年上の妹が村へやって来る直前に二人の年若い女がやって来て、結婚を申し込まれたが断った。私は、その事を忘れ油断していたが、全くの悪神（龍神の女）の料簡だった。手をつくった神の勇者を天上に遣わして、サンタウンマッたちを生き返らせそれぞれの村に帰さないならば、龍神たちを湿った死者の国へ蹴落としてやりましょう。手をつくった神の勇者に匹敵する者は一人もいないのです。」

すぐに兄たちは手をつくった神の勇者を遣わした。今初めて年若い私の姉はこの次第をみなことごとく知り、泣く声が美しく響き、「妹よ。心臓よ。」と私を撫でさすり、着物を一枚しか着ていないことに気づくとひどく恥ずかしく、二つ三つの涙にかきくれた。「私の妹のお陰で地上の国へ戻ることができたのだ。」と私の姉も、兄たちもポンモシリウマッ（いとこの女性）たちも大勢の人たちも、私を祝福し褒め称えた。

【xii. 生き返った年若い姉の提案と龍神の妹の処罰】

年若い姉の声が美しく響いてこう言った。

「ポンモシリの村で年若い兄と私が結婚することを、両親から言われた時は、心の底から嫌

だった。私と一緒に育てられた妹は結婚もせず一人で『神の山の倉』の御座所を守るように言われ、私はそのことに心を痛めていた。私は、妹に危ない所を助けられて今がある。私の妹を年若い兄の妾にして私たちは親のところで親の世話をし一緒に暮らしたい。これは悪い行いであるのかどうか、聞きたい。」

年上の兄が言った。

「私のおじが言い残した教えでは、ポンモシリの城は私が守り、私の弟がトミサンベチの上流と下流を治めるものだと思っていたが、私の年上の妹（主人公の姉）の意地っ張りなこと本当に良いことであり、おじもそれを断らないでしょう。私の弟よ、あなたも承知するのではないですか、どうですか。」

年若い兄が言った。

「私の兄が立派だと思ふものをだめだということは私はできないけれど、私の年若い妹よ、あなたはどのように思うのだろうか。承知してくれるのであれば私は本当に嬉しい。」

私は言った。

「私は心の中で本当にしたくないと思いながら御座所の守護をしていて、悪い女で、どんな木幣やどんな酒を作って治めることができるのであろうかと思っていたから、私の兄たちがそれらを作ってくれてくれるのであればとても嬉しい。私の親たちも本当に喜ぶでしょう。姉の計らいも本当に嬉しく、私も長い間姉に会わずにいることなどできなかったのです。」

私の兄たち、大勢の首領たち、淑女たちも本当に喜び「淑女だからこそ良い人だからこそ、よく耳を貸すのですよ。」と褒め称えた。年若い姉も、二～三日でとても元気になった。

手で作った神の勇者の遣いの夢のお告げによると、神々は激しく相談し、龍神たちは言い負かされ謝罪して、レプンサンタウンマツとヤンケサンタウンマツの魂を生き返らせ、龍神たちは本当の男たち淑女たちであったから、神の宝物をたくさん出して、はるか遠くに領有する村に降ろしたということだった。龍神の女神には死に値する罰を与えられひどく罰せられたとのことで、私たちは本当に安心した。

【xiii. トミサンベチシヌタブカへの帰還と酒宴】

私の兄たちの交易品を舟から降ろし、神の酒や美味しい食べ物を天上へ捧げ、神への祈禱の儀式を執り行った。毎日、神の酒と美味しい食べ物や団子などで酒宴が開かれた。

ポンモシリの年上の兄は思い立ち、兄夫婦とポンモシリウンマツと年若い私の兄と年若い姉と私で連れだって、お酒と立派な土産を持ち、トミサンベチシヌタブカにやってきた。

私の父母は、いつものように神のようであって、顔が光り輝き楽しく語り合っていたが、私たちを見るとたいそう驚いた。私と年若い姉と二人で、今まで起こった人間の話と神の話を伝えると、両親は国が揺れるほど驚き、「私の娘たちよ。」と言いながらいっせいに私たちの上に崩れ落ち、祝福した。そこで年上の兄は年若い姉の考えを伝え、「本当に良いことです。私たちは一緒に同意をしてやってきたのです。私のおじもおばもどう考えているのだろうか。悪いことでも良いことでも私たちは聞きたいのです。」と両親に意見を求めた。

私の父は「私が娘たちに伝え授けた教えは、本当に至らないものであった。私の甥たちは、

神を継ぐ人で類い稀な勇者で首領になる者たちだ。なぜ、私はこのような知恵の足りない教えを受けたのだろうか。私が悪かった。私の甥たちよ、私を許してくれるよう頼みます。」と謝っているものだから、私は逆に父が気の毒になった。

父の話を聞いた私の兄たちは喜び、「私のおじ。私のおばさん。」と膝で這って寄って撫でさすり合いながら両親と挨拶をした。

私の父は言った。「娘たちよ。穀物の残りで酒を醸して下さい。私の小さい甥を上座に座らせて、一人前に育てるつもりであることを天上までも聞かせるつもりなのです。」

私は、トミサンペチシヌタブカからポンモシリ村に戻り、六つの大吠を倉から降ろした。同族の少ない男たちや女たちや兄たちにも手伝ってもらいながら、穀物の精白や炊事や水くみをし、六つの行器を上座の方へ寄せて二～三日経つと、神の酒の香りが家の中へ漂ってきた。仲間たちがたくさん集まり、木幣を削る音を立て、酒を搾るざるの音が擦れ合うように響きわたり、とても気持ちがよい。

私の家の中も『神の山の倉』も新しい木幣で飾られ美しい光と白い霧と一緒に輝き、酒宴の用意ができた。私の両親は酒宴の盛装をしてなおいっそう神のようだった。祈祷の儀式について父が私に教え、酒宴の座が長く伸びており、年上の兄の礼拝を私は行器の後ろから敬った。

私たちも酒宴の盛装をし、年若い姉は、秀樽（ほだり）を自分の脇の下に持って酒宴の座の間を行き来し、お酌をして回った。遠い神近い神に酒杯の数をそろえ木幣と酒をささげ終え、それからまた神の山の御座所に火を燃やし、父母や兄たちや選り抜きの首領、淑女たちが群れをなして酒とご馳走を御座所の内部へ運び、私たちは神への祈祷の儀式と先祖供養も執り行い、私たちはすっかり安心した。

それからまた母屋で酒宴が開かれ、毎日まいにち楽しい酒宴おいしい食事をし、親族たちはみなことごとく二十、三十の礼拝をして感謝しながら帰っていった。年上の兄たちは、自分の村へ帰った。

【xiv. 年若い兄との結婚】

年若い私の兄と年若い姉は夫婦となり、私の両親の世話をしていた。私は、『神の山の倉』の立派な御座所で火を燃やして守り、年若い姉は、私の御座所へ一日に二度も三度も訪れた。私たちはとても仲が良かった。年若い私の兄が暗い夜明けに飛び上がり夕暮れ時に降ってくる音を聞きながら、私は刺繍に夢中になった。

ある時から年若い兄が私の前にぶら下がるように感じられ、姉も忙しいのだろうか、家に入ってくる様子もない。本当に寂しくて、年若い兄が思い出されて、早く私の御座所を訪れてほしいものだと考えた。食事もせず寝床で涙にかきくれるが、昼になると私は知らないふりをして刺繍をしながら、心を悩ませていた。

ある日のこと、窓の下へ仕留められた鹿が放り投げられた音を聞いた。間もなく、年若い私の兄が身支度を解き、玄関から案内を乞う咳払いをして、家の中へ入って来た。家の上座へ座り、まず神の老媪へ礼拝し、東隅に鎮座する神にも礼拝した。年若い私の兄は私を抱き

かかえ愛撫と接吻をした。それから年若い私の兄は立ち上がり、鹿の肝臓を皿に載せ、神の老嫗へ捧げた。高盛のご飯を年若い私の兄が半分食べ、あとの半分を私が食べ、いわゆる「飯食いの儀式」で私たちは結婚した。年若い兄が仕留めた獲物である鹿の肝臓と脂身をご馳走をして食べた。

年若い私の兄は狐運にも恵まれ、獲物をたくさん獲った。私たちの両親にも親孝行をした。

【xv. 子孫の繁栄】

やがて、私にも年若い姉にも赤ん坊が何人も生まれた。私の両親は、毎日まいにち孫たちに囲まれて楽しく過ごした。

私の両親は、娘たちが淑女であり、孫たちにも恵まれ、幸運にもめぐりあえた。私たちは人間の国で孝行され、神の国へ行く、と言った。

ポンモシリウンマツも本当の首領に嫁ぎ、年上の私の兄夫婦も幸せに暮らしているという評判を聞き、それぞれ何人も子供が生まれて幸せに暮らしていることに驚き喜んだ。

【xvi. レブンサウンマツとヤンケサウンマツの返報】

レブンサウンマツとヤンケサウンマツも幸運にめぐりあい、裕福な首領の夫を持ち幸せに暮らしていた。感謝を伝え返報するために陸に上がるつもりであると聞いた。

ある日、大きい帆掛け船が水面を二つに割って進む音を響かせながら私たちの入り江にまっしぐらにやってきた。本当に美しい出で立ちのレブンサウンマツ夫婦、ヤンケサウンマツ夫婦があらわれた。女たちは山丹の小袖を襲ね着して山丹の絹織物の帯をしていた。二人の年若い女は泣きながら私の年若い姉と一緒に撫でさすって祝福し、私に感謝した。

年若い兄はポンモシリの村に使いをやり、年上の兄夫婦もポンモシリウンマツ夫婦も早速来るようにと伝言した。それからサンタに住む男たちを使いをやり酒や穀物を御座所がいっぱいになるまで運び、殿の国に交易に行きすぐに私返報するために帰ってきたことであつた。山丹の絹織物の大きな反物を贈られ、心の底から喜び、感謝し拝礼して酒宴の準備をすると、破裂するような音、神のやってくる音がゴーゴーと鳴り響き、年上の兄の足音だと分かった。子どもたちの手を引いて入ってきて、私たちは抱き合い互いにあいさつした。

それから祈祷の儀式と酒宴を催し、サウンマツ夫婦に立派な宝物を贈ったので、サウンマツたちは驚きながら腰骨を屈めて泣きながら感謝し、また会おうと言って、涙とともに撫でさすりあい別れた。

私は年若い私の兄の世話をし、私は何を食べたいとも何を欲しいとも思わず、私たちの噂も非常に立派な評判としてたちあらわれてきて、いつも何不自由なく暮らしている。(おしまい)